

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	全日制課程	本校
----	------------	-----	----------------	------	-------	-------	----

1 教育目標

「学びの変革」の目指すべきモデルとなる学校として、学びを通じて平和な社会づくりを実現し続ける存在となることのできる人材を育成します。

2 育てたい(幼児・児童)生徒像

社会の持続的な平和と発展に向け、世界中のどこにおいても地域や世界の「よりよい未来」を創造できるリーダーとなる生徒

3 中期(3年間)経営目標 ※教育活動その他の学校運営に関する目標

- (1) 国際バカロレア教育を、教育活動の主たるツールとして充実させ、本校の教育目標の達成を目指す
- (2) 教科横断的に探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する
- (3) 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める

4 短期(本年度)経営目標及び行動計画等 ※中期経営目標を達成するための本年度の経営目標及び行動計画等

中期(3年間)経営目標				
(1) 国際バカロレア教育(IBプログラム)を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校のミッション、ビジョンの達成を目指す				
短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値(前年度)	目標値
IBプログラムを導入した本校のアイデンティティが具現化した姿を、生徒、保護者、教職員それぞれが、交流等を通して目指す学校の姿を自らの言葉で表現するとともに、自らが関与した行動や活動について、その目的や内容を説明することができる。	・教職員研修を実施し、本校のアイデンティティが具現化した姿を共有する。 ・留学生の保護者も意識した情報発信を行い、本校の目指す姿と教育活動の関係性を示す。 ・留学生を含めた生徒全員が、活動の目的と本校の目指す姿の関係性を振り返る活動を意識的に取り入れる。	ループリックを用いた自己評価(生徒・保護者・教職員対象 4段階)	3.1	3.1
日本の学習指導要領とIBプログラムを融合させた指導と学習の充実を図るために、学校の示す方向性を基に、IB推進チームと教科会の間で適切なコミュニケーションを行うなどして、校内組織の活性化が図られている。	・MYPチーム会議、DPチーム会議の定期的な実施と各教科会への効果的な接続を行う。 ・MYPチーム会議、DPチーム会議において、教科横断的な実践共有を行う。 ・各教科会を定期的かつ効果的に実施する。	教職員対象アンケート	88.7%	90%
校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施により、IBプログラムの充実が図られている。	・島内企業におけるインターンシップの実施 ・島のニーズを捉えたSAの実施 ・各教科における校外の資源を活用したカリキュラムの充実、改善(他校連携を含む)	ループリックを用いた評価(校外関係者からのフィードバックを対象 4段階)	-	2.8

中期(3年間)経営目標				
(2) 教科横断的に探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する				
短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値(前年度)	目標値
授業での学習活動に、見通しを持って粘り強く取り組み、その学習をまとめ、振り返って次につなげたり、仲間や地域の方々の対話や協働を通じて考えを広げたり深めたりすることができる。	・ATLスキルを用いて、各学年で目指す姿を、生徒及び教職員で共有する。 ・授業などの教育活動においてATLスキルが発揮され、伸長できる指導と学習を実践する。 ・ATLスキルの伸長に関する評価を定期的に行い、必要に応じて焦点化した指導を実践する。	ループリックを用いた自己評価(生徒・教職員対象 4段階)	平均値 3.2	平均値 3.2
正解が存在しない実社会の問いに生徒が向き合い、その課題解決に向けて収集・精査した情報を基に、授業で身に付けた知識・技能を活用して、自らの考えを形成し他者に表現できる、MYPの4年間を見通したプログラムを開発し、それを実践・検証する。	・ループリックを用いて、各教科の教科横断的な資質・能力を高める指導計画の充実を図る。 ・MYP及び未来創造科の集大成となるパーソナル・プロジェクトの実践を通して、MYP段階で育成する課題発見・解決能力を明確化するとともに、その実践を振り返り、未来創造科のカリキュラムの改善に活かす。	ループリックを用いた自己評価(教員対象 4段階)	平均値 3.0	平均値 3.2
教員一人一人が「教科横断的に探究的な授業づくり」を行うために必要な研修プログラムの開発を推進するとともに効果的な指導方法や教材開発の共有化を図る。	・恒常的な授業交流を行うことができる教員研修計画に基づき、それぞれの教員が、自らを高めるための研究・研修に積極的に取り組み、自己変革できる教員集団を目指す。 ・IB教育に初めて従事する着任者に対して、各教科主任とIB推進チームが協力して、単元	ループリックを用いた自己評価(教員対象 4段階)	平均値 3.2	平均値 3.2

	づくり等において周囲からのサポートやフィードバックを得やすい環境や機会を提供する。			
--	---	--	--	--

中期（3年間）経営目標				
(3) 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める				
短期（本年度）経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
集団への所属感や連帯感を深め、集団の構成者であることを自覚し、人と人の触れ合いやつながりを深めていくことができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会活動と寮での係活動とを関連付け、一人一人がリーダーとフォロワーの両面を経験し、様々な役割に対して、責任感を持って取り組み、集団生活の安定に向けて貢献できるようにする。 ・自発的に集団生活におけるルールやマナーを守り、個の役割を責任持って実践できる寮の組織づくりを行う。 	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	92%	95%
生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感ずることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・寮則の意味や目的を考えさせ、何のために守らなければならないのかを理解し実践できるような機会を創出し、評価場面を設定する。 ・異年齢集団での交流や寮スタッフとのコミュニケーションの充実を図るための機会を通して、協働することや、他者の役に立ったり貢献したりすることの喜びを得られる活動を充実させる。 	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	96%	98%
生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め、望ましい食習慣を身に付けている。	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の食事指導及び食に関する指導を行い、食事のマナーや望ましい栄養などの食生活に関する正しい知識を習得させる。 ・地場産物を活用した郷土料理の提供を通して、食事に興味・関心をもたせる。 	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	84%	88%

働き方改革に関する短期（本年度）目標

短期（本年度）目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。	子供と向き合う時間の定義について、全体研修等で理解を深め、この時間の確保のために必要な方策を検討し、実践する。	業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合	92.9%	95%
教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。	本校において設定した入退校時刻を意識した業務遂行ができるよう各分掌や学年で検討し、好事例を全体で共有する。	一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合	81.3%	100%
教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。	働き方改革取組方針等について、全体研修等で十分理解を深めるとともに、自らの取組状況を振り返り、課題や対策を見出す機会を設定する。	各学年・分掌において、年間2回研修を実施する	14回	20回

①	<p>国際バカロレア教育を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校の教育目標の達成を目指す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度は、中学校完成年度として、国際バカロレア教育を用いた教育活動の充実を図ることができた。特に、本校のミッションと、IBのミッションを照らし合わせ、学校コミュニティの構成員である生徒、保護者、教職員が具体的な行動を起こそうとしている点に関しては、大きな進歩があったと実感している。また、令和4年度の高等学校開校準備を通して、改めて本校の目指すべき姿を再確認するとともに、課題についても共有しながら開校準備を進めることができた。 ・今年度からMYPに加えDPも開始することから、その実施体制をより強固なものとしていく必要がある。特に、生徒の多様化に伴い、保護者の文化背景も多様化し、加えて教職員も多様化していくため、円滑なコミュニケーションを図り、学校の目指す方向性に対する共通理解を図る必要がある。 ・今年度は、高等学校開校及びDPが開始するとともに、留学生の受入れ、生徒・保護者・教職員の多様化と様々な変化が起こりうる。その中で、開校3年間で培ってきた本校のミッション・ビジョン・バリューをさらに浸透させて教育活動に取組むとともに、さらなるプログラムの発展及び生徒の進路実現に向け、校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施に具体的に取り組んでいく。
②	<p>教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・IBのフレームワークのうち、特にATLに着目した授業改善を行うことで、教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びの実現に取り組むことができた。教職員だけでなく、生徒自身も自身のATLの発達を意識しながら学習活動や日々の生活を送ることができた。 ・昨年度は上半期を終えた時点の生徒の振り返りを通じて、多岐にわたるATLの全てに取り組むのではなく、一部に焦点化して取り組むことがATLスキルの発展に効果的であることが分かった。下半期からは、学年ごとにATLを焦点化して取り組むなどした。 ・今年度は、MYPの集大成としてのパーソナル・プロジェクトに1期生が取り組むため、引き続きATLをはじめとしたIBのフレームワークを用いた教科横断的なアプローチを行いたい。特に、こちらから明示するだけでなく、生徒が主体的に自分の目標を設定し、取組の計画をし、実施し、評価できるような資質を育てていきたい。加えて、今年度からは、教科横断的な取組の中でも、特に言語の発達に関する取組を行っていく。特に、IBDPでフルディプロマを目指す上では、2科目以上を英語で履修する必要があるため、日本人の生徒にとって、英語の発達は必要不可欠となる。さらに、留学生を迎え、言語背景がより多様となる中で、留学生の日本語及び英語の発達、さらには母語の維持・発達にも組織的に取り組んでいきたい。
③	<p>寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人一人にとって、寮生活を通して、絆づくりや居場所づくりにつながるように自治的な活動の一層の充実を図ったことで、アンケートの結果においても肯定的評価が9割以上であった。生徒は、与えられた役割を果たすとともに、様々な活動に対して、自分自身がどのように貢献できるかを考え、実践することを通して、仲間や教職員、保護者、地域の方からの評価を受けて、自己有用感と自己肯定感を育むことができた。今後、生徒の主体的、自治的な活動をどのように支援していくか、また、学習や生活をまるごと見ていく際の関わり方は、教職員の更なる意識統一と、専門的な知見が必要となる。 ・食育や委員会の取組により、残食量の減少といった生徒の意識変化が見て取れた。一方で、食事及び、食品ロスや食事に関わる人への興味・関心の低さと食事の好き嫌いに相関関係が見られる。また、「好き嫌い」や「食事量の多さ」などから残食量に課題がある。食事に対する興味・関心の向上とともに、運動量を増加する活動や余暇の過ごし方の充実を図ることで、基本的な生活習慣を確立し、「運動・睡眠・食事」のバランスの取れた生活を実現するための支援が必要である。
働き方改革 各教職員が限られた時間の中で業務の効率化とタイムマネジメントに努め、「学校における働き方改革取組方針」の徹底を図る	
	<ul style="list-style-type: none"> ・評価指標「業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合」、及び「一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合」については、目標値には到達してはいないが、昨年度と比較して、業務改善アンケート項目における「一月当たりの時間外勤務時間」の肯定的回答の割合は微増した。 ・令和4年度から高等学校が開校し、完成年度まで、留学生を含め生徒・教職員が増加し、業務内容が複雑化、高度化することから、意図的計画的に準備の取組を進めていく必要がある。